

「映文連アワード2026」受賞主要作品紹介

■最優秀作品賞（グランプリ）

Return to My Blue （39分）

製作：野口雄大 / 中臺孝樹

監督：野口雄大 プロデューサー：野口雄大、中臺孝樹 ラインプロデューサー：小宮誠 アソシエイトプロデューサー：松井佳敬、小林由佳 撮影：勝野楓太、松永昂大、野口雄大、中臺孝樹、堀田弘明 整音：郡弘道 編集：堀田弘明 音楽：KAITO MORI、美音、アルベルト・ピッツォ カラリスト：堀田弘明 アートディレクター：塚本哲也 コピーライター：上田浩和 PRプロデューサー：尾上玲円奈

【作品概要】人工呼吸器をつけた10歳の吉原壮真くんが、沖縄の無人島への冒険に挑む短編ドキュメンタリー。電気も水もない環境は命に関わる危険を伴うが、「無人島に行きたい」というまっすぐな想いが医師を動かし、その同行によって旅が実現する。多くの人々に支えられ海を渡った壮真くんの「やりたい」という純粋な想いが、関わる人々の心を動かし、それぞれの中にある大切なものを呼び覚ましていく。



【選考経緯】人工呼吸器をつけ、医療的ケアが必要な吉原壮真くん（10歳）と母親の純代さんの沖縄・無人島への冒険ツアー。電気も水もない無人島への旅は無謀とも言えるが、壮真くんの「沖縄に行きたい」という強い想いに心を動かされた医師・山本英世さんが同行を申し出てくれ、さまざまな人々の協力もあって旅が実現する。飛行機に乗って沖縄へ到着、漁船で海を渡り、無人島へ上陸する。初めて海へ入る子供たちの弾けるような笑顔。とびっきり海を楽しむ姿は見ているものをも明るい気持ちさせてくれる。重度の障害を持つ子は意思疎通が容易ではない、親のエゴではないかという批判もなくはないが、お母さんたちは覚悟を決めた上で冒険ツアーの実現に向けて逞しく突破していく。命にもかかわる旅行なので最悪の事態に転じる可能性もあったと思うが、重度の障害があってもやりたい想いさえあれば、さまざまな人々が協力してくれ実現する。枠をはめなくてチャレンジすれば、思っていた以上の体験ができ、子どもの成長につながる事実を映画は示している。生きる意味と人の繋がり大切さを考えさせてくれるポジティブで感動的なドキュメンタリー作品である。

■文部科学大臣賞

還暦で歩む医師の道 ～古希まで10年の軌跡～ (60分)

製作：青森朝日放送株式会社

プロデューサー：葛西孝之、泉山まどか ディレクター：中寫修平 撮影・編集 荒幸一

音声：上坂ひろみ 音響効果：渡辺真衣 MA：浜元瑞樹 ナレーション：田口トモロヲ

【作品概要】青森県・十和田市立中央病院の水野隆史医師。官僚として働きながら、医学部受験をし、55歳で医学部に合格。60歳で医師免許を取得した。医師を志したきっかけは、ある1枚の新聞記事。宮城県に住む医師が62歳で医師免許を取得したことだった。さまざまな「年齢の壁」が立ちはいかりながらも「訪問診療」に注力。憧れの人の背中を追いかけ奮闘する70歳までの10年を描く。



【選考経緯】50代にもなると定年後の第二の人生をどう歩もうか、誰しも考える。人のために役立つ仕事がしたいと、50代半ばで医学部に入り、60歳で医師免許を取得。訪問診療に携わってきた十和田市立中央病院の水野隆史医師の10年間を追っている。若手医師には容易にできないなど「年齢の壁」にぶつかりながらも、「先生が来るのが楽しみ」と訪問診療に出向く先の高齢のお年寄りには好評。人が人生の最期を迎えるとき、高齢者を支え、気持ちに寄り添って診療する年配医師の存在はとても大切なのだろう。地元の放送局ならではの長期取材で、美しい十和田の四季や桜通りの蛙像を挟みつつ、水野医師の訪問診療を丁寧に追い、個々のエピソードもヒューマンで心温まるドキュメンタリーとなっている。水野さん憧れの先達、62歳で医師になった安積雅子医師が生き生きと働いてこられた姿もたいへん印象的。「人生は後半戦が勝負」と言われるが、思い立ったら遅いことはない、いつでも再スタートは切れる。何かに「挑戦」することの大切さを教えてくれる、人生指南の良質な映像作品である。

■経済産業大臣賞

KOBELCO120周年記念アニメーション「あしたのありがた」 (53分37秒)

製作：株式会社クオラス / コベルコビジネスパートナーズ株式会社

クライアント：株式会社神戸製鋼所

脚本：八津弘幸 声優：奈緒、濱田岳 主題歌：Novelbright クリエイティブディレクター：押切誠志
アートディレクター：郡司みのり コピーライター：日高延吉 プロデューサー：福元邦彦、折笠愛
アニメプロデューサー：釘宮陽一郎 監督：野田泰宏 総作画監督・キャラクターデザイン：佐藤好春
演出：前田薫平 絵コンテ：山下明彦、前田薫平 原案・制作総指揮：株式会社クオラス 製作プロダクション：株式会社21インコーポレーション、有限会社トラッシュスタジオ 制作：日本アニメーション株式会社、株式会社ドライブ

【作品概要】「あの時から… 私は明日を見失った。」2021年、KOBELCOで営業として働く明日実は会社の抱える様々な課題への無力感を覚え、仕事にやりがいを見いだせずにいた。「辞めたい」と上司に打ち明けようとしたその時、一冊の社史が不思議な光を放ち、明日実を1905年の神戸へと導く。そこで出会ったのは、熱意と理想にあふれる神戸製鋼所創業当時の人々。そして、不器用ながらも工業の発展を信じ夢を追いかける明治時代の青年トラスケ。生きる時代の違う二人は、社史に導かれ、歴史の原点から「いま」へとKOBELCOの歴史を駆けめぐる時の旅に出る。苦難を乗り越え、未来を信じて挑戦を続ける人々。時を超えて受け継がれる想いに触れながら、二人が選んだ未来とは？



【選考経緯】2017年データ改竄が発覚し、苦境に陥る神戸製鋼所。厳しい状況が続く営業担当の女性社員（木野明日実）を主人公に、アニメーションで神戸製鋼所120年の社史を紐解く。主人公の明日実は、タイムスリップして、トラスケ君（後の浅田長平社長）を相棒に神戸製鋼所の歴史を遡り、困難を乗り越える力を取り戻していく。時空移動に資料写真を絡めるなどオーソドックスな手法だが、八津弘幸氏（『半沢直樹』『下町ロケット』『VIVANT』等）の脚本がよく、創業時から現在に繋がる冒険譚のようになっていて没入して見ることができる。ここまで言うのかと思うほど自虐も緩めず、不祥事で落ちた信頼回復に本気で向き合う姿勢が伝わってくる映像である。二人の声優（奈緒と濱田岳）が素晴らしく、“お稲荷さん”の扱いも効果的で、物語に感情移入してしまうほど感動的なアニメーション社史となっている。取っ付きにくい「社史」に目を向けさせ、エンタテインメント性のある、見せる「社史」になっており、社員の士気を高めるとともに就活生へのリクルート機能も併せ持ち、社会的にも魅力ある企業と認識してもらえるような優れた企業映像となっている。

■ 東京都知事賞

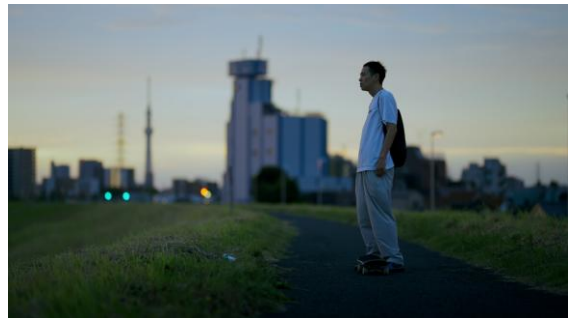
On the Side Street (29分42秒)

製作：山科晃一

脚本・監督・編集：山科晃一 プロデューサー：川崎裕也 ラインプロデューサー：伊藤梢

撮影監督：永田雅人

【作品概要】 覚醒剤取締法違反で服役した過去を持つ真田啓次郎は、社会復帰を目指して働きだした工場で、予測不能な行動をとる22歳のフリーター、森山千穂と出会う。過去を背負う真田と、今を生きることにも不器用な千穂。そして、工場長の佳代子もまた、自身の過去の傷を抱えながら、二人の姿を見つめていた。



【選考経緯】 人生をやり直すことが難しい現代だからこそこのテーマ。登場人物はそれぞれに痛みを持つ。覚醒剤をやって服役した過去をもつ若者（真田啓次郎）。彼を雇う女性工場長（佳代子）。会社を辞めると息巻いているフリーターの従業員（森山千穂）。三人はそれぞれ個別に生きてきており、会話はすれ違いつつも、不思議にコミュニケーションが成り立っていく。不器用ながらも善良に生きようとする若者たち。人物の描き方が上手く、とても自然で感情移入しやすいドラマになっている。音楽も効果的に使われ、孤独であったそれぞれが一人ではないと感ずるようになる。「生きづらさ」と「それでも幸せを見つけて生きていく」と言う、前向きなメッセージが伝わってくる、非常に作家性の高い作品である。

■優秀作品賞（準グランプリ）

サントリー ザ・プレミアム・モルツ マスターズドリーム 麦の個性篇 (2分50秒)

製作：株式会社KEY pro

クライアント：サントリーホールディングス株式会社

代理店：株式会社電通 / 株式会社電通アドギア / TeTo

エグゼクティブクリエイティブディレクター：奥野圭亮 クリエイティブディレクター：嶋野裕介
アートディレクター：塚本哲也 コピーライター/プランナー：小川祐人 プランナー：富田孝行
クリエイティブプロデューサー：杉田澄名 ビジネスプロデューサー：本郷敦司、山田一徳、関本
昌弘、堀内亮佑、向井朋葵、澤崎太一、島野陸 プロデューサー：城殿裕樹、市川拓弥 プロダ
クションマネージャー：小柳飛馬、坂本真波 演出：柳沢翔 カメラマン：岡村良憲 照明技師：
高倉進 美術デザイナー：栗林由紀子

【作品概要】4層の版木をゼロから制作し、60人の手で665枚を彫り上げる。その全プロセスを一彫りずつ光と連動させながらコマ撮りした。撮影時間は288時間。この気の遠くなるような工程を通じて、素材への敬意と日本のものづくりの執念を体現しました。楽曲は、久石譲氏による書き下ろし。AIで何でもつくれる時代にあえて人がやる意味とは何か。「なぜ、そこまでやるのか。」というコピーを、制作プロセスそのもので証明しています。



【選考経緯】AIで何でもできる時代にあえて人の手で挑戦する。素材や製法にこだわるマスターズドリームの姿勢を木版画作りに重ねた。「麦の個性に向き合うこと、全てはそこから始まる」と、一粒一粒の麦を版木665枚に彫り上げ、それをコマ撮りしていく。気の遠くなるような作業である。ものづくりの過程そのものがクラフトマンシップ讃歌と言える。前半は作品、後半は、制作のメイキングになっており、ブランドムービーとメイキングを組み合わせることでメッセージ性がより高まった。効率化や生産性を求める時代に「あえて人がやる意味」を、マスタードリームの姿勢にかけて表現した、ものづくりの心意気を感じさせる、美しく気迫溢れる映像である。

■優秀作品賞（準グランプリ）

E T V特集 それ、仏教かも。 謎の寺・寶幢寺の実験 (59分)

製作：テレコムスタッフ株式会社

クライアント：NHK

ディレクター：萩原翔 プロデューサー：田川友紀、佐々木健一、古屋敷将司 編集：宮田耕嗣
AD：吉野慶

【作品概要】「寶幢寺」では、松波龍源による仏教対話が行われている。“サイの角の様にただ一人歩め”とブッダが言ったように、自分で自分を救うための哲学を見つけ、社会で実装する。ある若い女性は同世代の若者たちに向けてSNSで心の向き合い方を伝え、大手企業を脱サラした男性は無農薬野菜栽培で「善」を追求し、元IT企業の社長室長は、デジタル時代の企業経営に悩みを抱えるビジネスマンに向け知性を鍛える方法を伝えている。



【選考経緯】人間関係や心の悩みを抱える現代人は多い。そんな人々が集まってくる「寺」がある。京都にある「実験寺院・寶幢寺（ほうどうじ）」。なぜ現代社会に仏教が求められているのか。寺は普通のビル、葬式や法要は行わず、檀家も取らず、運営費はお布施のみ。そんな型破りな寺の僧院長・松波龍源さんとの“問答”を求め、企業家や自治体関係者、大学生や若者など様々な人が訪れ、鍋を囲む。松波さんは悩んでいる人には、“苦”からの脱出を解く。幸せに生きるためには他者との“関係性の調整”を勧める。手痛い失敗を経て仏教へ道に入った松波さんの仏教対話にはたいへん説得力がある。寺の苦境を救った妻のさゆりさんや会計担当の平井さんの存在も大きいと思われる。この寺を訪れるSNSインフルエンサーの女性やパンク・ロッカーから農家になった男性など在家修業者との問答からも松波さんの仏教哲学が伝わってくる。「それって・・・かも」と押しつけがましくないナレーション（祷キララ）、松波さんの仏教哲学をアニメーションやCGを駆使して視覚化し、軽快な演出で見せてくれ楽しめる。テーマの着眼点もよく、取り上げる人々の魅力と相俟って、演出にクリエイティビティがあり、非常に完成度の高い番組となっている。

■優秀作品賞（準グランプリ）

そしてナイフを手にした （12分16秒）

製作：クワ ウケン（東京藝術大学大学院）

監督：Sam KUWA プロデューサー：山村浩二 サウンドデザイナー：suru

アシスタント：Ruki MAKINO

【作品概要】『そしてナイフを手にした』は、私自身の幼少期の記憶をもとに制作したVRアニメーション作品です。対戦格闘ゲーム『THE KING OF FIGHTERS '97』が流行していた当時のゲームセンターを舞台に、暴力や競争を通して無意識に「大人になる」感覚を描いています。本作では、VR空間内で記憶の風景を描き起こし、それを手彩色し再び360度映像として再構成しました。没入的な一人称視点を通して、記憶の中へ入り込む感覚そのものを映像体験として共有したいと考えています。



【選考経緯】監督の幼少期の記憶をもとに、対戦格闘ゲームが流行っていた頃のゲームセンターを舞台に描いたVRアニメーション。露天の食べ物を禁じられる、飼い犬を捨てられるなど、日常の些細な出来事が積み重なるうちに、鬱屈した気持ちとゲーム感覚の暴力性がちょっとしたきっかけで暴発し、重大な事件を引き起こす。VRによる1人称視点が効果的に使われ、大人に成長していく過程で感じるやり場のない鬱屈した感情、大人たちへの反抗心や大切なものを守り抜きたい気持ちがうまく表現されて、強く印象に残る作品となった。アニメーションの映像感覚に優れ、サウンドデザインも素晴らしかった。